

[論 文]

コンラート・ツェルティスの『ラブソーディア』

—16世紀初頭のハプスブルク宮廷における人文主義—

Die “*Rhapsodia*” des Konrad Celtis

Der Humanismus am Hof des Hauses Habsburg zu Beginn des 16. Jahrhunderts

田 中 圭 子

Tanaka Keiko

はじめに

1459年にフランケン地方に生まれた詩人コンラート・ツェルティスは、15世紀末から16世紀初頭にかけて、神聖ローマ帝国と周辺の諸地域における人文主義の普及に多大な貢献を行った人物であった。彼は、ケルンとハイデルベルクの大学で学んだ後、イタリアと中欧をめぐる遍歴の旅に前半生を費やし、帝国内外の各地で知識人サークルを創設して彼らのネットワークの要ともなった。専らラテン語で詩作と著述を行ったツェルティスは、1487年に、ハプスブルク家出身の皇帝フリードリヒ3世から桂冠詩人として戴冠された。バイエルンのインゴルシュタット大学などで教授活動を行った後、1497年にフリードリヒ3世の息子マクシミリアン1世に招かれてウィーン大学教授となり、この地で1508年に死去した。

ツェルティスの生涯は、イタリアに発した人文主義が、帝国において、イタリア人学者の宮廷への招聘やイタリアへの遊学・旅行などの人的交流を通じて受容された時期を経て、ドイツ人自身によって担われるようになる過程の最後の段階とほぼ重なっている。ドイツ人初の桂冠詩人となった彼自身が、その展開を体現していたといえるだろう。また、当時の知識人の主な活動の場は大学、都市、宮廷であったが、まさに神聖ローマ帝国国王（1508年より皇帝）マクシミリアンの宮廷への接近が、ツェルティスの活動に相応の影響を与えた可能性は否めない。

これらをふまえて本稿では、1505年に出版されたツェルティスのラテン語韻文による劇作品『ラブソーディア』(*Rhapsodia*)を取り上げる¹。すでに前稿において、1501年にマクシミリアンの前で上演された『ディアーナ劇』(*Ludus Dianae*)の内容を検討し、その中にみられるハプスブルク王朝理念とツェルティスのゲルマーニア概念に基づく表現について指摘を行った²。本稿は、これに続く補論となる。第1章において、『ラブソーディア』の執筆から出版に至るまでの経緯と刊本の構成について述べ、第2章では、本作の内容から読み取られる著者の目的や意識、帝国観についての考察を試みたい。

1 『ラプソーディア』の成立—上演と出版

『ラプソーディア』は、1504年9月12日、レーゲンスブルク近郊のヴェンツェンベルクにて、マクシミリアン指揮下の軍がボヘミア傭兵を含むプファルツ軍と戦い、勝利したことを祝うために、おそらくは10月前半に書かれた作品である³。この勝利によって、マクシミリアンが国王として介入したバイエルン継承戦争の帰趨が事実上決定づけられた。それゆえに、この出来事はマクシミリアンの帝国における権威と政治的影響力の上昇をアピールする政治的宣伝の格好の材料となりえたのである。そこで、まずはこの戦争の経過について、簡略に述べておきたい⁴。

バイエルンを支配するヴィッテルスバッハ家は、15世紀半ばからバイエルン＝ミュンヘン公家とバイエルン＝ランツフート公家の2系統に分かれており⁵、後者のゲオルク富裕公が男子継承者を残さず1503年12月1日に死去したことが、バイエルン継承戦争（ランツフート継承戦争）を引き起こす契機となった。ゲオルクは、遺言書で娘エリーザベトとその夫、やはりヴィッテルスバッハ家の血統であるプファルツ選挙侯家のルプレヒトを継承者に指定し、これによって、帝国法とバイエルン公家内の相続協約に基づくミュンヘンのアルプレヒトとヴォルフガング兄弟の継承権を排除しようとした。この対立に際し、国王マクシミリアンはミュンヘン側による相続を認めたが、ルプレヒトは武力をもって継承権を要求し、バイエルン継承戦争が始まったのである。アルプレヒトが、妻クニグンデの兄でもあるマクシミリアンの支持を取り付け、シュヴァーベン同盟や幾人かの帝国諸侯、帝国都市ニュルンベルクを味方としたのに対し、プファルツ側はボヘミア傭兵を募ってこの戦いに投入した。その結果が、前述のヴェンツェンベルクの戦いにおけるマクシミリアンの勝利と、これに続くクーフシュタイン要塞などの攻略による戦争の終結、そしてバイエルン＝ミュンヘン公家によるバイエルン＝ランツフート公領の継承を認めた1505年のケルン帝国議会における裁定であった。

『ラプソーディア』本文は、全238行のラテン語の詩句からなるが、物語性はほとんどみられず、登場する人物がそれぞれ順に詩句を述べていく形式の、いわば朗読劇というべき作品である⁶。前口上役がマクシミリアンに呼びかけて彼の戦勝を告げ、続いてアポロー、メルクリウス、そしてサテュロスとファウヌスを引き連れたバックスが登場するまでを、この作品の導入部とみなすことができる。次いで、9名のムーサによって順に朗読される、マクシミリアンの軍事的才能と君主としての優れた資質を称賛する内容の詩が、161行すなわち全体の約3分の2にわたって続く。本作の主要部分といえるムーサたちの詩の後には、桂冠を受ける詩人が舞台上に登場する場面が挿入されている。劇の最後を彩るのは、楽器を携えたアポローとムーサたち、そしてバックスとサテュロスたちによる歌と踊りであり⁷、メルクリウスが国王役と短い対話を交わし、観客に挨拶をして幕切れとなる。

本作は、1504年のうちにヴィーンで上演された⁸。会場は、ツェルティスがヴィーン大学内に創設した「詩人と数学者のコレーギウム」が置かれていた建物、シトー会の聖アンナ修道院であったといわれる⁹。17名の出演者について、それぞれの名前と役柄が伝わっているが（前口上役2名、メルクリウス、バックス、アポロー、9名のムーサのほか、合唱が3名）、その中には、オーストリア貴族やヴィーンの都市門閥の子弟たちが多く含ま

れており、ムーサたちのような女性の役も彼らによって演じられた。また、出演者のうち少なくとも7名は、1504年前後にヴィーン大学で学生登録していることがわかっている¹⁰。従って、この劇に出演したのは、「詩人と数学者のコレーギウム」で学ぶヴィーン大学の学生たちであったと推測されている。彼らは、将来においてハプスブルク家の統治を支える外交官や書記官として働くために修辞や雄弁を学んでいたのであり¹¹、ラテン語劇の上演は、教育の一環としての性格を併せもっていたといえる。

しかし、『ラプソーディア』上演に際して、賛辞を捧げられる当人である国王マクシミリアンの臨席は得られなかった。10月のクーフシュタインでの戦い以降も、マクシミリアンはイン川流域地方に留まり続けていたためである¹²。作中には、国王自身が舞台上に登場し、他の登場人物と台詞を交わす場面も含まれているため¹³、これを一つの「役」として誰かに演じさせたと考えられている。詳細は知られていないが、作者ツェルティスが国王役を務めた可能性もある¹⁴。

上演の翌年、1505年にアウグスブルクで出版されたことにより¹⁵、本作品はラテン語を解する層に広く読まれる可能性を得たが、その際に頌詩や書簡など様々な文書とハンス・ブルクマイルによる木版画2点を加えられたことが注目される。追補分を含めてもわずか12葉の小冊子ながら、その構成自体の中にすでにツェルティスの意図を読み取りうるのである。換言すれば、この冊子の中に集められた一見雑多にもみえるテキスト群と図像が、『ラプソーディア』を読むうえで不可欠の枠組みを提供しているといえるため、その概略について、内容自体の検討を行う前に触れておきたい¹⁶。

刊行された冊子の構成をみると、『ラプソーディア』本文を中心とする前半（A1－A6の6葉）と「詩人と数学者のコレーギウム」の学生たちが書いた詩を中心とする後半（B1－B6の6葉）の2つの部分に分かれている。

前半が始まるA1葉表には、題目に続けて、マクシミリアンのためにドイツ語の詩文を書く者たちに対抗してラテン語の優位を主張するエピグラムと、ネーデルラントから帰還したマクシミリアンを称えるエピグラムが掲載されている¹⁷。その裏には、ブルクマイルが制作したボヘミア人との戦いの木版画と¹⁸、ツェルティスが用いた"Boemanni"（ボヘミア人）という語の由来を尋ねるアウグスティヌス・モラウスからの書簡、これに対するツェルティスの返信が印刷されている¹⁹。A2葉表からA5葉裏まで『ラプソーディア』本文が掲載され²⁰、その後、フス派のボヘミア人を批判するエピグラム²¹、ボフスラウス・フォン・ハッセンシュタインへの頌詩が添えられている²²。前半の末尾には、1編のエピグラムとともに、後半に収録された詩の作者である学生たちの名が4名ずつ3クラスに分けて記されている²³。

後半はB1葉表のマクシミリアンへの献辞に始まり、その裏にはブルクマイルが「コレーギウム」の権標を描いた木版画が印刷されている²⁴。B2葉表からB6葉表まで、学生によるマクシミリアンを称える詩が、上記のリストの順に掲載されている²⁵。最後を締めくくるのは、1505の年記を伴う奥付と、シュマルカルデン出身で「ドナウ文芸協会」のメンバーであったヨハンネス・シュトゥルヌスがツェルティスにあてた詩、そしてツェルティスがマクシミリアンにあてて書いた詩である²⁶。

2 『ラブソーディア』におけるツェルティスの目的と帝国観

上述の『ラブソーディア』刊本全体の構成をみると、単にひとつの祝祭劇の脚本を出版することのみが、この冊子制作の目的であったとは考えにくい。では、この著作の中には、作者ツェルティスのいかなる意図が重ね合わされていたのだろうか。本章では、国王マクシミリアンの宮廷で活動する知識人としてのツェルティスの立場に着目しつつ、いくつかの側面から指摘を行っていきたい。

まず、『ラブソーディア』においてツェルティス自身が追求した第一の目的は、1501年10月31日にマクシミリアンの勅許を受け²⁷、翌年2月1日に²⁸ヴィーン大学の既存4学部 に並ぶ教育機関として開校された「詩人と数学者のコレーギウム」のプロモーションを行うことであったと考えられる。これを裏付けるのは、『ラブソーディア』刊本の後半にまとめて収録された「コレーギウム」関係の文書と木版画、そして本作がおそらく「コレーギウム」の学生によって上演されたことである。また、劇中に桂冠詩人の登場場面が加えられていることも、この文脈の中で捉えられる。マクシミリアンは「コレーギウム」創設にあたり、その長となるツェルティスに対して、学業を修了した学生に一種の学位として「桂冠詩人」(poeta laureatus)の称号を授与する権利を認めていたからである。ツェルティスが用いる「コレーギウム」の権標一式(双頭の鷲を先端に戴き7選挙侯の紋章を柄に付けた笏、指輪と帽子、メルクリウスとアポローを刻んだ印章、アポローとミネルヴァが支える双頭の鷲の紋章を飾った月桂冠)を描いた木版画もまた、その特権的な地位を強調する役割を果たしている²⁹。

ツェルティスがこのようなアピールを試みた背景には、ヴィーン大学の教育をめぐるある種の競争があった。ツェルティスは、人間形成の基礎となるのは古代の著作家の研究であると考え、これを通じてラテン語による詩作と雄弁の術を身につけ、さらに自然科学的な知と統合してゆくことを目指していた³⁰。また、このような教育は、君主による統治を支えるエリートの育成に貢献しうる、という側面において実際的な利点を有していた³¹。だが、新たな教育の導入にあたって、ヴィーン大学で実施されてきたスコラ的教育との摩擦が起きるのは不可避であった³²。逆に、人文主義的教育を担える人材を招聘するのであれば、ツェルティスのようなドイツ人ではなく、イタリア人が望ましいとする意見もまた存在していた³³。そのような状況下で、ツェルティスが自らの主導する教育の価値をつねに発信していく必要を感じていたのは、当然のことであっただろう³⁴。

加えて、まさにマクシミリアンの宮廷において、ツェルティスはもう一つの競争と直面していた。マクシミリアンは、自身とハプスブルク家の事績を同時代人に広く伝達するのみならず、その記念を後世に残すことにも注力した君主であった。そこで主要な手段とされたのがテキストと図像の組み合わせであり、例えばマクシミリアンの生涯や家系の歴史をテーマとする挿画入り書物や大規模な木版画連作の制作などが試みられている³⁵。これらの実現にあたっては、視覚的イメージを創出する芸術家のみならず、テキストを書き、図像プログラムを考案することのできる知識人も動員された。しかしそこで用いられる言語の選択が、ツェルティスにとっては大きな問題であった。例えば、マクシミリアンの自伝的物語『ヴァイスクーニツヒ』の制作が開始されたのは1502年頃とみられているが、当

初はラテン語を用いる予定であったにもかかわらず、最終的にはドイツ語でテキストが作成されている³⁶。言語間、あるいはそれぞれの言語を用いる文筆家たちの間の競合を目の当たりにして、ラテン語詩人ツェルティスは、ドイツ語に対するラテン語の優位とその有用性を繰り返し主張する必要を感じたに違いない。『ラプソーディア』の刊本冒頭に添えられたエピグラムでは、ラテン語で書かれた事柄は、ドイツ語文とは異なり、ボヘミア、ハンガリーからスペイン、ブリテン島にまで至るヨーロッパ諸国で読まれると言明されている³⁷。その実践例を、学芸を推進するパトロンであるマクシミリアンに対して提示しようとしたのが、ラテン語の劇や詩をまとめた『ラプソーディア』であったといえるだろう。

こうした実践において、格調高いラテン語詩の韻律の中に、古代に源泉をもつモチーフおよびハプスブルク家と帝国の歴史に関わるモチーフをふんだんに鏤めてみせたことも、同様のアピールの一環とみなすことができる。そのようなモチーフの例をここに示してみたい。

前作『ディアーナ劇』では、中心となる登場人物は月の女神ディアーナであったが、『ラプソーディア』では、太陽神アポローがその位置に配されている。メルクリウスとバックスは両作に登場し、前者は導入あるいは幕引き担当、後者はオーストリアに葡萄酒もしくは詩という恵みをもたらした存在として言及される³⁸。注目すべきことに、『ラプソーディア』では、マクシミリアンをポイボス・アポローに擬する比喩が用いられている。開幕とともに舞台上で「選挙侯に扮した者たちがともに着座した後」³⁹、前口上として「相反する動きによって分散する7つの惑星の中心にて、輝けるポイボスよ、あなたが光を発するように、皇帝は7名の高貴な存在に囲まれて玉座につき、そこに神聖なる権威とユピテルの鳥が存するのです」⁴⁰との詩句が述べられる。つまり皇帝と7選挙侯が、太陽と7つの惑星に喩えられているのであり⁴¹、「ユピテルの鳥」である鷲は、帝国の紋章の図柄でもある。

ハプスブルク家の血統については、その発祥をローマに求める起源説がみられた『ディアーナ劇』とは異なり、『ラプソーディア』で祖先を遡ろうとする試みは、ルードルフ・フォン・ハプスブルク、バーベンベルク家の聖レオポルトまでにとどまっている⁴²。その一方で、カール大帝以降の歴代ドイツ皇帝の名が列挙されており⁴³、彼らの後継者であるマクシミリアンがローマにおける皇帝戴冠、そして異教・異端の討伐へと赴くことへの期待が語られている⁴⁴。

また、『ラプソーディア』におけるツェルティスの意図を考えるうえで見過ごせないのは、マクシミリアンの勝利を称える際に、ボヘミア人のみが敵として名指しされていることである⁴⁵。ヴェンツェンベルクの戦い直前に急死したルプレヒトが『ラプソーディア』に登場しないのは当然としても、その他の諸文書においても、プファルツ選挙侯家側に関する言及はまったくみられない。

そこで、まず『ラプソーディア』における、ボヘミア人に関する言説の例をみておきたい。ムーサたちの中で最初に登場する、歴史を司るクリーオは「兵力に富み、戦いにおいて勇敢かつ大胆で、荒々しい民からなるボヘミア人」を「高名なるあなた（マクシミリアン）は打ち倒します」⁴⁶と歌い、フス戦争以来名高いボヘミア兵の強さへの言及を通じて、マクシミリアンがこれを上回る強さを発揮したことを強調している。最後に現れるムーサ、

天文を司るウーラニアは「願わくば、あなたがローマの冠を頭上に戴き、また勇敢に武器をふるい、ヨーロッパの境からトルコ人とローマの法から離れたボヘミア人を追い払うとき、あなたの星にますます偉大なことが生じますことを」⁴⁷と述べている。同様に、終幕近くに登場するバックスも「彼（マクシミリアン）がボヘミア人と……不信心なトルコ人を、恐るべき剣をもって我らの土地から遠ざけられるよう」⁴⁸願うと歌っている。つまりボヘミア人は、カトリック教会からの離反者として、異教徒トルコ人と同列に置かれているのである。

ボヘミア人を異端として非難する態度は、『ラブソーディア』本編の前後に添付された書簡や詩においてさらに顕著に現れている。アウグスティヌス・モラヴスがツェルティスに宛てた書簡では、俗人に対してもパンと葡萄酒の双方を用いて聖餐を行うボヘミア人を批判して、彼らはキリストの体と血を毎日のように至るところで口にしているため、「神を食らう者」を意味する言葉で呼ばれるべきではないか、と述べられている⁴⁹。ツェルティス自身によるフス派についてのエピグラムでは、フスをアレマンの白鳥のもとに飛んで来るガチョウに喩え、そこでイタリアの狼に羽をむしられ焼かれてしまった、と揶揄するだけでなく、再びドイツにやって来て敗北を喫したボヘミア人に、祖国にとどまり我々の宗教（カトリック）に回心するよう警告を発している⁵⁰。ボフスラウス・フォン・ハッセンシュタインへの頌詩の中でも、ボヘミアの没落を招いた混乱の一因として、ウィクリフの禁じられた教えに従う者たちの存在が言及されている⁵¹。

フス派の間に広く普及していた両形色の聖餐は、1436年のバーゼル協約、1485年のクトナー・ホラの協定によって、ボヘミアにおいては認められていた⁵²。しかし、その他の地域ではむしろその限りではなく、ツェルティスもかねてからフス派への反感を抱いていたといわれる。彼は、1491年のプラハ訪問の際にウトラキスト派を風刺する詩を書いたために、この町から逃げるように立ち去らなければならなかった。こうした個人的な体験ゆえに、『ラブソーディア』においてもボヘミア人への攻撃的言説が繰り返されたとする推測もある⁵³。

しかし、ツェルティス自身のフス派への敵意が著作に現れていることは否定しえないとしても、同作中でプファルツ選挙侯家への言及を欠くことに対する説明にはならない。その点を考えるためには、ツェルティスとヴィッテルスバッハ家の関係について、あらためて確認しておく必要がある。

ツェルティスは、1497年のヴィーン大学への招聘以前、インゴルシュタット大学で教授活動を行っていた。この大学はバイエルン＝ランツフート公家のルートヴィヒにより1472年に創立され、その息子ゲオルクが1492年にツェルティスを招いた。この年に1冊にまとめて公刊された「バイエルン公への頌詩」と「インゴルシュタット大学における公開演説」は、ツェルティスが教育における人文主義的な理想と方針を述べた文書として知られているが、その献呈相手は、すでに1479年に故人となっていた大学創立者ルートヴィヒ、その息子ゲオルク、そして1476年に死去したヴィッテルスバッハ家のプファルツ選挙侯フリードリヒ1世と、彼の甥にして後継者、フィリップ5世であった⁵⁴。フィリップ5世の息子プレヒトは、ゲオルクの息女エリーザベトと結婚し、バイエルン継承戦争の当事者となった人物である。つまり、『ラブソーディア』において称賛されたマクシミリアンの

勝利は、ツェルティスのパトロン的存在であったバイエルン＝ランツフート公家およびプファルツ選挙侯家の陣営の敗北を意味していたのである。このような関係があったからこそ、ツェルティスはプファルツ側に対する非難を避けたのみならず、ヴェンツェンベルクの戦いが起きた理由としてのバイエルン継承問題にも全く言及せず、帝国に侵入した異端のボヘミア人を国王マクシミリアンが撃退した、と読者には受け取られる形で、この作品を刊行したと考えられる。その背後には、バイエルン継承戦争への介入により起きたヴェンツェンベルクの戦いを、異端に対する一種の「十字軍」として伝えようとするマクシミリアン側の宣伝戦略が存在した可能性もあるだろう⁵⁵。

さらに付言するならば、ルプレヒトの父フィリップと兄ルートヴィヒ5世はプファルツ選挙侯の地位を有していたが、ツェルティスにとって7選挙侯は、『ラブソーディア』中に表現された通り、太陽＝皇帝を取り囲む7つの惑星に例えられる、帝国の秩序において不可欠の存在であった。前述した「コレギウム」権標の木版画にみられる笏にも、皇帝の双頭の鷲の紋章と7選挙侯の紋章が飾られている。帝国の中で皇帝に次ぐ地位を占める選挙侯に対しては、各々の利益を追求しようとする政治的態度を、「相反する動きによって分散する7つの惑星」という表現によって暗示するにとどめ、明らかに批判的な言説は控えられたのではないかと推測される。

代わって非難の対象とされたのがボヘミアのフス派であったわけだが、そこから逆に、ツェルティスが想定していた帝国像の一端を見て取ることもできる。あらためて確認すると、彼にとって、排除されるべき存在はボヘミア全体ではなく、この地でフス派の信仰をもつ人々であった。『ラブソーディア』に添付された書簡や詩の受け手であるアウグスティヌス・モラヴスとボフスラウス・フォン・ハッセンシュタインは、いずれもボヘミア王国出身の人文学者であるが、宗教的にはカトリックの聖職者でもあった⁵⁶。つまり、信仰を共有し、ラテン語でのコミュニケーションが可能な知識人層の内部においては、一定の共感と連帯の意識が存在していたことが窺えるのであり、それこそがツェルティスの考える人々の統合のあり方を特徴づける要因であったように思われる。換言すると、選挙侯をも従える力をもつ皇帝によって体現される秩序に加えて、カトリック信仰とラテン語を基盤とする帝国、それが『ラブソーディア』という書物から抽出しうる、ツェルティスの帝国観ではなかつたらうか。

おわりに

『ラブソーディア』の上演と出版においてツェルティス自身が追求した目的は、人文主義的教育を提供する「詩人と数学者のコレギウム」と、君主の栄光を伝えるに相応しい手段としてのラテン語詩のアピールであった。また、作品そのものの目的であったマクシミリアンの勝利の称賛にあたっては、選挙侯家も含む帝国諸侯間の対立という側面は隠され、帝国首長と異端者との戦いに読み替えられる形で表現された。さらに、本作においては、具体的な帝国国制や諸勢力間の関係に踏み込むような言及を伴うものではなかつたが、皇帝と7選挙侯を太陽と7惑星に喩えるイメージも示された。

前稿では、ツェルティスの『ディアーナ劇』においては、ローマに由来する帝権と学芸

のドイツへの「移行」という観念の反映がみられること、ドイツ（ゲルマニア）は政治的・民族的にではなく、地勢に基づいて地理的に定義されていることへの指摘を行った。これを補完しているのが、『ラプソーディア』から読み取られる、皇帝と選挙侯により体现される帝国のイメージ、ならびにカトリック信仰とラテン語の共有がその普遍的な広がりを保証し、統合の基盤ともなりうると感じる意識ではないかと考える。

しかし、ツェルティスの観念の中では、帝権がローマからドイツに「移行」される一方で、その学芸を担う言語はラテン語のまま固定されており、ドイツ語話者が多数を占めるドイツの現実においては、それが「矛盾」として立ち現れたといわざるをえない。また、ツェルティス没後に開始された宗教改革によってキリスト教世界がカトリックとプロテスタントに二分されるに及び、彼の抱いた帝国イメージは完全に破綻したといえるかもしれない。

とはいえ、ツェルティスの影響を受けた人文主義的なカトリック知識人は、なおもハプスブルク家の宮廷で活動を続けており、学芸の分野のみならず政治の実務に携わった者も多い。彼らが、その知識と経験に基づいていかなる帝国像を構想し、現実政治の中で、あるいは芸術作品によるイメージとして表現しようとしたか、その検討は今後の課題に属するが、これによりカトリックのハプスブルク家を頂点に戴く帝国における人文主義の展開の歴史の一面を明らかにすることができると思われるものである。

[注釈]

¹ ツェルティスのラテン語劇に関する先行研究としては、Alfred Schuetz, *Die Dramen des Conrad Celtis*, Diss., Wien, 1948; Heinz Kindermann, "Der Erzhumanist als Spielleiter. Zum 500. Geburtstag von Konrad Celtis", in: *Maske und Kothurn*, Bd.5, 1959, S.33-43; Jan-Dirk Müller, "Maximilian und die Hybridisierung frühneuzeitlicher Hofkultur. Zum *Ludus Dianae* und der *Rhapsodia* des Konrad Celtis", in: Sieglinde Hartmann / Freimut Löser (hrsg. v.), *Kaiser Maximilian I. (1459-1519) und die Hofkultur seiner Zeit*, Wiesbaden, 2009, S.3-21.

² 拙稿「コンラート・ツェルティスの『ディアーナ劇』とマクシミリアン1世」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』51巻、2014年、43～57頁。ツェルティスの生涯と主要な業績についても、この拙稿を参照されたい。

³ 執筆時期の推定については、Schuetz, *op. cit.* S.71f., Anm.2, S.134. ヴェンツェンベルクの戦いについては、Hermann Wiesflecker, *Kaiser Maximilian I. Das Reich, Österreich und Europa an der Wende zur Neuzeit*, Bd.3, Wien, 1977, S.186-192. マクシミリアン側の軍勢は9000名、対するプファルツ側は6000名、そのうち3000名がボヘミア傭兵であったという。

⁴ バイエルン継承戦争の経緯については、*Ibid.*, S.164-205.

⁵ バイエルン公家は、1392年の領邦分割以来、バイエルン＝ミュンヘン、バイエルン＝インゴルシュタット、バイエルン＝ランツフートの3系統に分裂していたが、1447年にバイエルン＝インゴルシュタットの男子継承者が断絶し、2系統のみが残っていた。

⁶ Konrad Celtis, *In hoc libello continentvr. Divo Maximiliano Avgvsto Chvnradi Celtis Παρωδία Lavdes et victoria de Boemannis* …, Auguste Vinde[licorum], 1505, fol.A2r-A5v (以

後、*Rhapsodia*と記す)。本稿では、オーストリア国立図書館所蔵の刊本を参照した。Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Sign. 44.V.55. 以下の文献にラテン語テキストとドイツ語訳が掲載されている。Schuetz, *op.cit.*, S.59-88; K. Adel, *Konrad Celtis: Poeta laureatus*, Graz - Wien, 1960, S.110-115. 但しAdelの著作に収録されているのは一部の抜粋のみである。『ラブソーディア』諸版については、Raimund Kemper, "Anmerkungen zu einem Exemplar der *Ραφωδία* des Conrad Celtis in der Württembergischen Landesbibliothek in Stuttgart", in: *Euphorion*, 68, 1974, S.105-109; Jörg Robert, "Celtis (Bickel, Pickel), Konrad (Conradus Celtis Protucius)", in: Franz Josef Worstbrock (hrsg. v.), *Deutscher Humanismus 1480-1520. Verfasserlexikon*, Bd.1, Berlin, 2008, Sp.411-414.

⁷ 『ディアーナ劇』刊本には、この作品で用いられた曲の楽譜が掲載されていたが、『ラブソーディア』の音楽を伝える楽譜はなく、その詳細は不明である。

⁸ 本作の上演に対する反応を含むアウグスティヌス・モラヴスのツェルティス宛書簡が11月30日付であるため、上演はこの日以前であるはずである。Hans Rupprich (hrsg. v.), *Der Briefwechsel des Konrad Celtis*, München, 1934, Nr.320, S.575f. 上演日の推定については、Müller, *op.cit.*, S.14, Anm.16.

⁹ Kindermann, *op.cit.*, S.41.

¹⁰ オーストリア国立図書館所蔵の刊本巻頭に添付された紙片に、上演時の配役が手書きで記載されている。Gustav Bauch, *Die Rezeption des Humanismus in Wien. Eine literarische Studie zur deutschen Universitätsgeschichte*, Breslau, 1903, S.146f. ; Schuetz, *op.cit.*, S.136ff., Anm.1.

¹¹ 実際に、『ラブソーディア』に出演したヒエロニムス・フォン・レーヴェンとヴォルフガング・プラントナーは、それぞれ後にフェルディナント1世の書記長、カール5世の秘書官となっている。Bauch, *op.cit.*, S.147; Schuetz, *op.cit.*, S.138.

¹² Viktor von Kraus, "Itinerarium Maximiliani I. 1508-1518", in: *Archiv für österreichische Geschichte*, Bd.87, 1899, S.275f.

¹³ *Rhapsodia*, fol.A2r, A5v; Schuetz, *op.cit.*, S.59f., 87f.

¹⁴ Müller, *op.cit.*, S.16.

¹⁵ 1505年に、わずかな相違を伴う2つの版が出たとされる。Robert, *op.cit.*, Sp.413. 出版時期に関する議論については、Kemper, *op.cit.*, S.108.

¹⁶ 刊本の構成の記述に際しては、次の文献も適宜参照した。Schuetz, *op.cit.*, S.50f.; Robert, *op.cit.*, Sp.412f.

¹⁷ *Rhapsodia*, fol.A1r. 1505年夏にゲルデルンで起きた戦いからの帰還とみなされている。Schuetz, *op.cit.*, S.53f., Anm.4., S.138.

¹⁸ *Rhapsodia*, fol.Alv. 元々は、1504年にドイツ語テキストを添えた1枚刷り木版画として制作されたものである。木版画中に説明のために挿入された語句をラテン語化したうえで、図像部分のみを『ラブソーディア』に流用している。Peter Luh, *Kaiser Maximilian gewidmet: die unvollendete Werkausgabe des Conrad Celtis und ihre Holzschnitte*, Frankfurt a. M. 2001, S.273-275.

¹⁹ *Rhapsodia*, fol.Alv. アウグスティヌス・モラヴスは、1467年にモラヴィアのオロモウツ

で生まれたと考えられている。クラクフとパドヴァで学び、フェッラーラで教会法博士の学位を得た一方で、ギリシャ語や天文学の知識も有する人文学者であった。1496年から1511年まで、ボヘミア・ハンガリー国王ヴラディスラフ2世の秘書官、副書記長としてブダペシュトで活動した。オロモウツの司教座聖堂参事会員でもあり、ボヘミア兄弟団を異端とみなして批判した。1513年没。Ralf G. Czaplá, "Augustinus Moravus", in: Worstbrock (hrsg. v.), *op.cit.*, Sp.61-72.

²⁰ *Rhapsodia*, fol.A2r-A5v.

²¹ *Ibid.*, fol.A5v.

²² *Ibid.*, fol.A5v-A6v. 当初はヨハネス・アルプスに宛てられていた頌詩を、ここでは献呈する相手を変えて用いている。ボフスラウス・ロプコヴィッツ・フォン・ハッセンシュタインは、1461年頃に、ボヘミア北部に所領を有する貴族ロプコヴィッツ家の一員として生まれた。ボローニャとフェッラーラで学び、教会法博士になるとともに、人文学研究にも親しんだ。彼は両形色の聖餐を認める穏健なフス派（ウトラキスト派）の支持者であったとみられるが、おそらくボローニャでカトリックに転じた。また、ボヘミア王国をも包含する帝国への帰属意識と、「ドイツ人」としての自意識をもっていたといわれる。1491年にオロモウツ司教に選出されたが、教皇アレクサンデル6世の承認を得られず、その後も司教位に就くことはなかった。ツェルティスら中欧の人文主義者と親交があり、古代作家のみならず中世の作家や自然科学にまで及ぶ幅広い関心を有していた。1510年没。Jan-Dirk Müller, "Hassenstein, Bohuslaus Lobkowitz von (Bohuslaus a Lobkowitz)", in: Worstbrock (hrsg. v.), *op.cit.*, Sp.1032-1048.

²³ *Rhapsodia.*, fol.A6v. このリストに登場する学生たちについては、Bauch, *op.cit.*, S.148-150.

²⁴ *Rhapsodia*, fol.B1r-B1v. マクシミリアンへの献辞は1502年あるいは1503年に書かれたと考えられており、1枚刷りで公刊されていたものが『ラプソーディア』刊行に際して取り入れられた。献辞の執筆時期に関する議論については、Kemper, *op.cit.*, S.106-108; Robert, *op.cit.*, Sp.413f. 「コレーギウム」権標の木版画については、Luh, *op.cit.*, S.275-278.

²⁵ *Rhapsodia*, fol.B2r-B6r.

²⁶ *Ibid.*, fol.B6r-B6v. ニュルンベルク市立図書館、ヴェルテンベルク州立図書館（シュトゥットガルト）、大英図書館（ロンドン）所蔵の刊本には、単頭の黒い鷲の紋章を描いたブルクマイルの木版画が添付されている。Luh, *op.cit.*, S.270-271; Robert, *op.cit.*, Sp.413.

²⁷ マクシミリアンの名で出された特許状のラテン語テキストは、以下に掲載されている。Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.266, S.458-460. ドイツ語訳は、Inge Wiesflecker-Friedhuber (hrsg. v.), *Quellen zur Geschichte Maximilians I. und seiner Zeit*, Darmstadt, 1996, Nr.35, S.129-130.

²⁸ 開校日にはツェルティスの誕生日が選ばれたといわれる。Claudia Wiener, "Et spes et ratio studiorum in Caesare tantum. Celtis' Beziehungen zu Maximilian I.", in: Gesa Büchert / Claudia Wiener (hrsg.v.), *Amor als Topograph: 500 Jahre Amores des Conrad Celtis. Ein Manifest des deutschen Humanismus*, Schweinfurt, 2002, S.75.

²⁹ Luh, *op.cit.*, S.275-278. 但し、「コレーギウム」において詩人として戴冠されたのは、お

そらく1502年のヨハネス・スタビウスの事例のみである。桂冠詩人戴冠権は、元来は皇帝に帰属する権利であったため、実際にはマクシミリアン自身によって行使され続けた。Alois Schmid, "'Poeta et orator a Caesare laureatus". Die Dichterkrönungen Kaiser Maximilians I." in: *Historisches Jahrbuch*, Bd.109, 1989, S.75f., 98f.

³⁰ それら全てを包含し、かつ中心に位置すると考えられたのは哲学であった。ツェルティスが創案したプログラムに基き、1502年にアルプレヒト・デューラーが制作した木版画「哲学」では、四季、四方位、人間の四気質などを表した図像の中心に、玉座についた哲学の擬人像が描かれている。また、この作品と同じくツェルティスによるプログラムに従って、ハンス・ブルクマイルが1507年頃に制作した木版画「帝国の鷲の寓意」においても、哲学の擬人像は画面の中央、世界を象徴する球体の上に配置されている。しかしこの木版画においては、哲学のさらに上方にムーサたちの泉が、構図の頂点をなす位置には皇帝マクシミリアンの姿が描かれている。Peter Luh, *Der "Allegorische Reichsadler" von Conrad Celtis und Hans Burgkmair. Ein Werbeblatt für das Collegium poetarum et mathematicorum in Wien*, Frankfurt a. M., 2002, S.82f.; Eva Michel / Maria Luise Sternath (hrsg. v.), *Kaiser Maximilian I. und die Kunst der Dürerzeit*, München – London – New York, 2012, Nr.33, 36, S.188f., 192f.

³¹ 例えば、ラテン語のリテラシーは文書行政や外交交渉において必要とされる能力であり、数学を基本とする自然科学的知識は、当時の人々に大きな影響力をもった天文学、さらには軍事技術などにも応用しうる。「コレギウム」創設の勅許において、公共の分野における指導的な人材や後世に有益な文書を著した人材を数多く輩出したローマの伝統に則った大学の創立、と述べられているのは、マクシミリアンが寄せた期待の表れであろう。Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.266, S.459; Wiesflecker-Friedhuber (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.35, S.129; Wiener, *op.cit.*, S.76f.

³² ヴィーン大学の改革の試みと、スコラの性格の残存については、Bauch, *op.cit.*, S.94-116.

³³ ヴィーン大学へのイタリア人詩人の招聘を主張したのは、すでに先駆的な人文主義的教育を試みていたベルンハルト・ペルガーであった。ペルガーについては、*Ibid.*, S.14-24, 55-61.

³⁴ 木版画「帝国の鷲の寓意」も、「コレギウム」の周知を目的として出版されたと推測されている。Luh, *op.cit.*, S.90f.

³⁵ マクシミリアン周辺の芸術活動に関する文献として、近年開催された展覧会カタログをあげておく。Michel / Sternath (hrsg. v.), *op.cit.*

³⁶ Wiesflecker, *op.cit.*, Bd.5, Wien, 1986, S.315f.

³⁷ 「我ら（ラテン語作家が書いたもの）は、フランス人、ボヘミア人、スラヴ人、ハンガリー人、ローマ人、スペイン人、バスク人、ブリタニア人、アイルランド人が読むであります。」 "Nostra leget gallus, Boemannus, sarmata, panno, / Rhomulus, hispanus, uasco, britannus, erix." *Rhapsodia*, fol.A1r; Schuetz, *op.cit.*, S.51f.

³⁸ 『ディアーナ劇』では、ヴィーン (Vienna) という地名は葡萄酒 (vinum) に由来する、と語られている。Konrad Celtis, *Ludus Diane in modum Comedie coram Maximiliano Rhomanorum Rege ...*, Nuremberge, 1501, fol. A4r; Schuetz, *op.cit.*, S.38f. 『ラプソディ

ア』では、終幕近くのバックスの歌の中で、多くの詩人を輩出したオーストリアについて触れられている。*Rhapsodia*, fol.A5r; Schuetz, *op.cit.*, S.85f.

³⁹ "dum personati / Electores consedisent." *Rhapsodia*, fol.A2r; Schuetz, *op.cit.*, S.59f.

⁴⁰ "Ceum septem aduerso discurrunt sydera motu, / Inter que medius splendide phoebe micas. / Sic Caesar residet septeno numine cinctus, / Sancta ubi maiestas, et iouis ales adest." *Rhapsodia*, fol.A2r; Schuetz, *op.cit.*, S.59f.

⁴¹ 皇帝＝太陽とみなす表現は、1522年に印刷されたデューラー作の木版画『マクシミリアン1世の凱旋車』に添えられた銘文 "Quod in celis sol. Hoc in terra Caesar est" (天における太陽は、ここ地上では皇帝なり) にもみられる。Michel / Sternath (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.60, S.258ff.

⁴² ハプスブルク家以前にオーストリアを支配していたバーベンベルク家のレオポルト3世(1136年没)は、マクシミリアンの父フリードリヒ3世の治世、1485年に列聖された。*Rhapsodia*, fol.A3r; Schuetz, *op.cit.*, S.67f.

⁴³ 作中に登場する皇帝の名は、カール大帝のほか、オットー、バルバロッサ、ハインリヒ、コンラート、ルートヴィヒである。*Rhapsodia*, fol.A4r-A4v; Schuetz, *op.cit.*, S.79f.

⁴⁴ 後の注47参照。

⁴⁵ マクシミリアンの功績を伝える前口上では「彼(マクシミリアン)は、我らの時代を永遠の平和となし、北方より迫り来るボヘミア人を打ち倒されました」と語られている。"Qui nostra aeterna componens temp[or]a pace, / Strauit ab arctoo uenientes axe Boemos," *Rhapsodia*, fol.A2r; Schuetz, *op.cit.*, S.59f.

⁴⁶ "Bemorum de gente fera, qua[m] tu inclytus armis, / Militibus grauidam, fortem belloque ferocem / Sternis …," *Rhapsodia*, fol.A2v; Schuetz, *op.cit.*, S.63f.

⁴⁷ "Sed maiora tuis fieri his speramus ab astris, / Postquam Rhomanam gestabis fronte coronam, / Finibus europae dum pelles fortibus armis / Turcum, et Rhomana Boemannum lege solutum." *Rhapsodia*, fol.A4v; Schuetz, *op.cit.*, S.81f.

⁴⁸ "Vt queat nostris remouere terris / Perfidu[m] turcum gladio minaci / … / Cum Boemannis." *Rhapsodia*, fol.A5v; Schuetz, *op.cit.*, S.87f.

⁴⁹ *Rhapsodia*, fol.A1v; Schuetz, *op.cit.*, S.55f.

⁵⁰ *Rhapsodia*, fol.A5v; Schuetz, *op.cit.*, S.89f.

⁵¹ *Rhapsodia*, fol.A6r; Schuetz, *op.cit.*, S.89ff.

⁵² 薩摩秀登『プラハの異端者たち—中世チェコのフス派にみる宗教改革—』現代書館、1998年、153～158、195～197頁。

⁵³ Schuetz, *op.cit.*, S.145f.

⁵⁴ Robert, *op.cit.*, Sp.391.

⁵⁵ ヴェンツェンベルクの戦いに十字軍としての性格を与えようとするマクシミリアン側の動きについては、Wiesflecker, *op.cit.*, Bd.3, S.187.

⁵⁶ アウグスティヌス・モラヴスとボフスラウス・フォン・ハッセンシュタインについては、注19、22参照。